



日 口 交 流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



日本らしさを感じる「和」のアレンジ作り

榎本 江美子

今回、千葉さんからイベントのご依頼をいただきました。内容は、アレンジメントを作って欲しいというお話でした、参加者の方々が、外国の方対象という事を伺い、私も初めての事でしたので、私に出来るかしら?と迷いましたが、通訳に千葉さんも参加されると伺ったので、安心して引き受ける事としました。

まず、アレンジはどのようなデザインが良いのか?と考えましたが、日本らしさをお伝えしたいと思い、お正月アレンジを作る事と決めました。

お花は、プリザーブドフラワーと、アーティシャルフラワー〔造花〕の2種類を使用しました。器には、お酒を飲む時に使う杓を選び、お正月飾らしく華やかにし、紅い薔薇、白い椿の花で紅白を表現し、赤の水引、金銀の扇など…また、千代紙を使ったり、漢字のお正月文字もプラスしてみました(謹賀新年…) お正月文字の漢字は何種類かあって、漢字の意味も説明していただきました。

今回のアレンジで、一番大変なの所は、花を大輪にする事



で、赤い薔薇の花は、大輪の花にする為に、花びら一枚一枚を数枚ちぎり取り、ハサミを使って広げて、また元の花びらへと戻すという行程がありました。そんな

難しい工程も、皆さん真剣に説明を聞いていただき、あっという間に大輪の花をととても上手に作られていました。

日本の方に同じように教えても、一度の説明ではなかなか分からない方が多いのですが、今回参加された皆さまは、とても器用で、しかも早く驚きました。モノづくりが得意なのですね。言葉も上手く伝わらない中、仕上がりがとても綺麗で、本当に素晴らしく大変嬉しく思いました。

ワークショップ後の皆さまが、笑顔になられていたので、楽しんでいただけたのだと思っています。今回、このようなイベントを開催して頂きありがとうございました。

(アトリエ澄花房)

以上は友人の今回の講師榎本江美子さんに書いてもらいました。お手伝いをしていた私も同感でした。人間には右脳と左脳があると言いますが、ロシアの方は、左右のバランスが大変優れていて、今回のようなものづくりの時は右の力が大きいので、感覚でさっと作ることが出来るのでしょうか。これは友禅教室の時も思います。

小さい頃からの教育、美術や音楽に直に触れる機会が多い少ないはかなり影響すると思います。日本人も、頭が柔らかい時期から、均質でないものを沢山吸収してほしいものです。私も今からでも遅くないので、感覚を磨く更なる努力をしたいと思っています。

(理事・笠原以津子)

お知らせ

●日本の家庭料理講習会 (2)

日時: 2024年2月18日 (日) 9:30~12:00

場所: 田町「リーブラ」料理室

会費: 2,500円

●マースレニツァ

日時: 2024年3月3日 (日) 13:00~15:00

場所: 田町「リーブラ」

参加費: 1,000円

スラブのお祭りを歌や踊りでお祝いします。ブリヌイなどもご用意してお待ちしております。

●NPO日口交流協会第24回(通算60回)通常総会開催

日時: 2024年3月30日 (土)

●ロシア語教室生徒募集中!

水曜初級1A-1 (19:00~20:00) 1A-2 (20:05~21:05)

土曜上級 (10:00~11:30) 月曜準中級 (18:00~19:00)

*1回見学できます。

*会員の方のためのクラスです。変更の場合もありますので、事前に事務局までご連絡ください。レベルやご希望に合わせて担当よりご案内いたします。

お申込み、問合せ: NPO日口交流協会事務局

Tel: 03-5563-0626 E-Mail: nichiro@nichiro.org

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらかでも結構です。内堀學氏、齊藤斗志二氏、朝妻幸雄氏、服部文男氏、島山堅蔵氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座00160-9-66486、加入者名: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org
Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752 *なお、お振込みの際に、寄付であることが分かるようにお名前の前に「01」とお入れください。よろしくお願ひ致します。



年初めの書道教室に参加して

長島 さくら

1月13日、ロシア大使館にて書道教室が行われました。以前留学生向けの書道教室で私も世話になった武井幸一先生が講師となり、大使館からは大人から小さなお子さんまで計14人のロシアの方が参加されました。私は副会長の千葉さんと一緒に先生のお手伝いをさせて頂きました。

まず筆に慣れるため、先生が筆の持ち方や横・縦画の基本を丁寧に説明した後、練習をしました。入りの筆の向き、終筆の止め、腕全体で書く、といった点に皆さん苦勞していました。先生は左利きの人を見ると半紙の向きを変え、書きやすくしてあげていました。その後は、先生がリクエストされた字を書き、そのお手本を見て練習しました。干支に関連した「辰」「龍」のほか「幸」「健康」「愛」「東京」「米」「月」等のリクエストがあり、余白が無くなるまで沢山練習している皆さんの姿が印象的でした。書き順や画の長短のバランスにも苦勞されていて、私たちが何気なく書いている漢字一つにも難しさが凝縮されていると感じました。

私が小筆を持っていたこともあり、名前を日本語で書いてほしいと数人の方に頼まれました。中には「愛」という字の両側に父と母の名前を書いてほしいという女の子や、自分と妻の名前を書いてほしいという男性の方がいました。日本人にとっては直球すぎて思いつかないような真っ直ぐな表現と、誰かを想って書くという気持ちが素敵だなと思いました。

現在私も地元の書道教室に毎週通っています。小・中学生



の時に習っていましたが、一度辞めました。しかし大学4年でロシアのリヤザンに留学した際、大学で書道のマスタークラスをしたり街のイベントで書道をする機会があり、その時、書道に興味を持ってくれる人が多

かったり、日本語で名前を書くのを喜んでくれた事が本当に嬉しかったのです。そうした場では様々な人との繋がりもでき、書道でこんなにも自分の世界が広がるのだと思いました。そこから「もう一度書道を学びたい」と思い、帰国後にまた同じ先生のところへ通い始め、続けています。

昨年9月友人を訪ねてエストニアを訪れたのですが、ロシアでの経験を思い出し、筆と墨汁も一応持って行きました。友人の家に滞在させてもらったため、彼女の親戚も呼んで日本食を振る舞った際、日本語で一人ひとりの名前を筆で書いた紙を各々の席に置きました。自分の席を予想してもらうという狙いも込めてやったところ、グーグル翻訳のカメラ機能でエストニア語へ早速翻訳されてしまいました…(笑)。全員が名前の紙を持ち帰ってくれたことを知り、それだけで嬉しく思いました。

今回ロシア人の皆さんが誰一人集中力を切らさず真剣に書に向き合っている姿を見て、改めて私も書道を頑張ろうと思いました。また、筆づかいの細かいニュアンスや漢字についてロシア語でもきちんと説明できるよう力をつけていきたいです。武井先生、千葉さん、参加者の皆様、ありがとうございました。

雪道もベビーカーで

キタヤマ 忍

北海道の冬の風物詩の一つが「ソリに乗って運ばれる子供」だ。私も約半世紀前には運ばれていたし、私の母世代でも似たようなものだから文化と言っても過言ではない。現代では除雪が良くなったとは言え、ベビーカーやスーツケースの車輪は雪道では機能しない。

ところが同じ雪国でも北方圏では状況が少し違う。雪質にもよるが車輪サイズや構造、またスキーのアタッチメントを使うことで解消している。スキーのアタッチメントは車椅子用に開発されたものを応用していて、スーツケースにも利用できる。ロシアでも日本でも手に入るのだから冬の旅人にはぜひおすすめしたい。

ベビーカーに話を戻すと、ベビーカーが夏のように使えれば、親子共に安全に広く外出できるのではないかな？モスクワには森のような公園が幾つもあがるが、白銀の森でもベビーカーを押しての散歩や買い物を目にした。モコモコに暖かく装備した赤ちゃんがあまりに可愛らしくて、ベビーカーの車輪がどうだったかは記憶にはない。ただソリから落とされたり、車などの危険も避けられるし、道路の雪を子供が食べたり、帽子が無くなることも、引つ張るお母さんが体を痛めずに済むと感心した。



サハリンのベビーカー

サハリンに住む友人が教えてくれた夏冬兼用ベビーカーは画期的だった。土台がスキーになっていて、座席下のハンドルを足で押すだけで車輪とスキーが切り替わるのだ。アタッチメントの付け外しの手間もなく、子供を乗せたまま公園から屋内にスムーズに行ける。ロシアのショッピングサイトの口コミでも「とにかく便利！」と評判が良い。

目と鼻の先のサハリンにはあるのに北海道にはなぜ上陸していないのか？輸入か製造でもと友人と話し続けたが、なんと実際に個人輸入されたママがいた。そしてその快適さを広めたいと数年に渡り尽力され、ソリ兼ベビーカーがついにこの1月に日本で販売される。ソリ文化の日本には馴染みが良く、プラソリより高さがあり安心感もある。もちろん夏も使える。ロシアと日本、北国の子供達がソリベビーカーの思い出で会話が弾む日が楽しみだ。

(ビデオグラファー)

日本で販売されるsorica(ロシア製)ブログ: 雪道用ソリベビーカーを普及させよう。 <https://yuki-michi.com>



国際放送史研究の戯言No026

追悼・日向寺康雄さん

島田 顕

2024年1月5日に、モスクワ放送（ロシアの声）の先輩である日向寺康雄さんが急逝された。悪性リンパ腫だった。昨年12月20日に緊急入院するとの知らせを受け面会に行こうとしたのだが、基本的に面会謝絶の病棟で、当初面会はできなかった。ようやく面会が許されたのは、かなり症状が進んでからのこと。12月31日に面会に行ったら、酸素吸入のマスクをつけ、息も絶え絶えの状況だった。苦しそうだったけど、会話はできた。冗談交じりの「プーは何している？」という言葉が印象的だった。すでに固形物を食べることができず、ジュースしか飲むことができなかったのも、院内のコンビニでミネラルウォーターなどを大量に買い、病室の冷蔵庫に入れて、退出した。回復を信じて。しかし願いはかなうことはなかった。

新年になってますます面会が厳しくなった。じりじりと過ごしているうちに、1月3日の早朝午前3時30分に病棟から電話があり、意識がないということだった。1月4日に面会に行ったときには、名前を呼んでも答えることはなく、眠っているだけだった。帰りに主治医に呼ばれ説明を受け、覚悟しておくようにと言われた。翌日1月5日朝、心臓が止まったとの連絡を受け急いで駆け付けた。病室では心電モニターがゼロでまっすぐ横線を引くのみ、主治医の死亡確認に立ちあった。1月10日に密葬を済ませ、お骨は最後の住処に仮安置されている。

日向寺さんは、1958年生まれ、早稲田大学文学部ロシア文学科を卒業後、1987年からモスクワ放送に勤務、2017年に帰国するまでの19年にわたり、日本語放送のアナウンサー兼翻訳者をつとめた。その間モスクワ放送はロシアの声、ラジオスポーツニクと名前を変え、短波・中波での放送からインターネットでの配信放送



在りし日の日向寺康雄さん

にかわり、廃止を迎えた。現在はニュースを中心としたホームページを残すのみである。日向寺さんと出会いは、私がロシアの声に採用された後の1996年の9月に横浜でのことだった。その後赴任後に空港に迎えに来てくれたのも日向寺さんだった。1997年のロシアで迎える初めての正月に、赴任草々の私を気遣ってくれて自室に招いてくれて、夜通しいろんなことを話した。私が放送局をやめた後も、モスクワに行くときには必ずお会いしていた。日向寺さんが日本に戻ってきてからも。スーパー銭湯にはよく行ったし箱根に2度ばかり泊りに行ったこともあった。昨年夏には、ムヘンシヤンの故郷である、福岡県の英彦山と一緒に泊まりに行くはずだったのだが、日向寺さんがコロナにかかってしまい、かなわなかった。

日向寺さんが亡くなってから、様々な方々に連絡した。そこで日向寺さんの知識の深さ広さと、交流の幅広さを思い知らされることになった。バタバタとしていて連絡が取れなかった方々も多くいることは間違いない。この場所をお借りしてお詫び申上げたい。また後日お別れの会を開くことを計画しており、その時にご連絡差し上げたいと思う。これを読んで日向寺さんのお別れの会に参加されたい方は、日口交流協会を通して連絡してください。よろしくお願ひ申し上げます。

日向寺さんの功績については他の方が書くのであえてここでは書かない。だが、ロシアと日本を照らす大きな星が墜ちたという喪失感とは、決して拭い去ることはできない。



日向寺康雄さんが2024年1月5日に亡くなられた。日向寺さんは2009年5月から2023年12月号まで「日口交流」紙の中で『モスクワ・アラカルト』を78回にわたり連載。東日本大震災のチャリティーコンサート等を大使館で実現できたのも日向寺さん尽力によるもので、実に永きにわたり協会になくはならない人だった。『モスクワ・アラカルト』は冊子にする予定で進めていたが「表紙は少し費用を出しましょうか」と協会の台所事情を知って慮ってくれたりしていた。いつも笑顔で、絶えず誰かのお世話を奔走している姿ばかりが思い出される。

3月には役員として迎えられる予定で、総会の講演もお願いしていたのだったが、あまりにも突然早世されてしまった。

ロ日協会から弔辞が届きましたので、ここに掲載させていただきます。(広報部)

全ロシア社会組織「ロ日協会」

親愛なる皆様！ 日口交流協会幹部及び会員の皆様！ “ロ日協会” 会員にとり日向寺康雄氏の急逝の一報は大変な衝撃でした。この有能なジャーナリスト、アナウンサー、通訳者そして卓越した人物のご逝去に際しお悔やみを申し上げます。

1987年から30年間にわたり日向寺氏は後日1993年に“ロシアの声”と名称が変更された“モスクワラジオ”に勤務され、日本の

皆さんと日本にいる我々の同胞にロシアの生活を知らせることでロシアの文化とロシア語の普及に尽力され、真の民間外交官としての真価を発揮し、ロシアと日本人の架け橋の役割を果たされました。我々同僚の思い出では、日向寺康雄氏は職場で大変な権威と尊敬を享受し、日本の聴衆のための番組の普及に尽力してプロフェッショナルとして創造的人材として自らを示しました。同氏は常に同僚を助けるために駆け付け、困難な状況からの解決策を見つけてくれた、仲間たちの中の魂であり、仕事場では友好的雰囲気を作りあげたのです。

日向寺康雄氏の思い出は同氏の同僚及び聴取者、そしてまた日本とロシア間の人文交流の発展に携わるすべての皆様の心にとっても残るでしょう。どうか日向寺氏の近親の皆様すべてに私たちの心からの励ましの言葉をお伝えください。

思い出は永遠に！日向寺康雄様のご冥福をお祈りいたします。

ロ日協会会長 Galina Dutkina

ロ日協会理事長 Marija Kirichenko

ロ日協会事務局長 Evgenij Kruchina

ロ日協会サイト管理者 Oleg Kazakov

“ロ日協会” 会員一同



ウズベキスタンのバザールとショッピングモール

川端 良子

現地の食に接することは旅の大きな楽しみの一つです。プロフ(油多めでお肉がいっぱいのピラフのようなもの)やシャシュリク(中央アジアのBBQ) ラグマン(麺料理)などウズベキスタンを代表する多くの食べ物があります。それ以外にウズベキスタンの食や文化を感じられるところ場所として、バザールとショッピングモールがお勧めです。



なウズベキスタンのスイーツなどが売られています。しかし別の建物で、1階に冷凍のうなぎやエビ、イカなどの海鮮商品や焼き肉のたれが売られており、2階に豚肉コーナーと、駐在の方々も利用するような建物もあります。

地元の人たちが主に利用しているのは今もバザールです。政府がバザールの衛生面強化を打ち出したため、冷蔵庫に食品を保存するようになって、きれいになってきていますが、日本の市場とおなじようなワクワク感は今も健在です。

タシケントにはいくつものバザールがあり、それぞれに特徴があります。地下鉄の駅から近いバザールとして、庶民の台所チョルスーバザールと外国人観光客向けのアライスキーバザールがあります。旧市街のチョルスーバザールはタシケントの活気を感じられるバザールです。1階で肉製品や乳製品を2階でドライフルーツを扱っている建物は、青いタイルでできたチョルスーバザールのシンボルのような建物です。その横には野菜や果物などの生鮮食品が売られている建物があります。また、ウズベキスタンの伝統的な陶器や絹織物、衣装などの販売している場所や、衣料品や手芸用品を販売しているところ、食事をするとところもあり、すぐに時間がたってしまう。

町を中心にあるアライスキーバザールは、改装をしてバザール内にスーパーマーケットができ、観光客のお土産になるよう

タシケントには他にも、豆腐や白菜、もやしなどや韓国系の食品の食品を多く扱っているクイリュックバザール、衣料品がたくさん販売されているイップドロームバザール、土・日曜日に巨大な中古品バザールがたつヤンギアバットバザールなど、特徴のあるバザールがたくさんあります。ヤンギアバットバザールでは、旧ソ連時代の硬貨や写真、陶器や絨毯などのアンティークを扱う場所もあります。

ショッピングモールは日本と同じようなイメージで、スポーツ用品、衣料品、家電製品、化粧品、カフェなどのいくつもの店舗が入っており、多くのところで1階にスーパーマーケットが入っています。地方都市でもショッピングモールが多くできてきており、ウズベキスタンの若者が何に興味を持っているのかがわかります。

ウズベキスタンに旅行の際には、ぜひバザールやショッピングモールまで足を延ばして、ウズベキスタンの人々の今をぜひご自身で体験してください。

(NPO法人日本ウズベキスタン協会理事長)

ヴォルガの古都コストロマー

畔上 明

『大きな思想というものは、カスピ海へ注ぐヴォルガのようなものだ…』

『マネーファは窓の敷居に肘をついて、人の心を動かすような優しさをたたえた灰色の瞳でじっとヴォルガ川を見つめた。ああ、彼女はどんなにかこの川を愛していることだろう。波静かな時も、風の吹く時も、嵐の時も、照る日も曇る日も、いつもこの川を愛してきた……』

子供の頃、父親からトルケスタンの話を聞くと「そのヴォルガ川はここよりも大きいの?」と訊ねて、そこにはヴォルガ川は流れていないという返事には驚いて「そんなところに人間が住んでいる? ヴォルガ川がないのにどうして人が住めるの?」と思わず叫んだほどだった。

それは子供の時であった。しかし、もう間もなく二十歳になろうとしているが愛してもいない男との二年間の夫婦生活から多くのものを経験した今でも、ヴォルガ川を愛する心は衰えないばかりか、却って一層つきつめた、もっと深く、温かなものとなっている。生活では得られないものを、この大河は満たしてくれるのだった。』(セルゲイ・マクシーモフ(1916-67)「ヴォルガの四季」原題「デニス・ブシューエフ」木下高一郎訳より)

ヴォルガ川はロシアの歴史と文化と密接な関わりがあり、生活そのもの、思想、はじけんばかりの激情のみならずであることが、小説からも伝わってきます。マクシーモフの作品は、川との関りの中での様々な人間模様、生活形態が活写されていて、嵐、吹雪、やりきれない暑さ、夫婦、親、おじいさん、不倫、喧嘩、恋、殺人、人民の敵という名の下での逮捕、製材工場、集団農場、

航海士、水路標識係、筏、漁師、画家、詩人、タタール集落、波止場の荷役人の監督、元舟曳き、薪泥棒、教会の破壊、干草置場、モスクワから来た文化人の別荘、馬、魚釣り、丸太作りの風呂小屋、火事、少年から青年への成長……と川が他の社会への窓口にもなっていることが示されます。

さらに、19世紀の劇作家アレクサンドル・オストロフスキー(1823-86)の戯曲「雷雨」や「持参金のない娘」からは、ヴォルガを背景とした現代にも通じる嫁姑の葛藤、愛のもつれが描かれ胸を打ちます。紹介した小説や戯曲の舞台がどれも古都コストロマー、訪れる前から魅力を感じないわけにはいきません。「黄金の環」の中ではモスクワから最も遠い、北東に340km先のコストロマーはユーリー・ドルゴルーキーが1152年に築いた町です。

中心となるイパチエフスキー修道院は、幾度か歴史上の大舞台となっており、1600年ボリース・ゴドゥノフがロマノフ一族を幽閉したことで、グリーンカのオペラとなった「皇帝に捧げし命(イワン・スサーニン)」によって後世に知られるようになりました。1612-13年の動乱時代(スムータ)末期、ミハイル・ロマノフの隠れ場所を探していたポーランド軍に対し、コストロマーのドムニノ村の百姓イワン・スサーニンが道なき深い森の中へ導き入れ、その企みに気が付いたポーランド人はスサーニンをサーバルで殺してしまうのです。しかし、拳句は彼らも戻り道が分からなくなり密林をさ迷い歩いた末、戦いに敗れてしまうという結末、そして新しい時代を迎えるのでした。